

剣禅・書の達人 ③ 山岡鉄舟展

山岡鉄太郎(鉄舟)は戊辰戦争終結後、徳川家の静岡移封に従って移住し、静岡藩の若年寄格幹事・権大参事などとして廃藩置県まで藩政の中核を担った。

その際の鉄舟の卓抜した行政手腕に目を付けた明治政府は、1871(明治4)年11月13日に内紛の続く茨城県の初代参事(県令が空席で県政トップ)に任命した。内紛の根を断つ刷新人事を断行して事態を収束した鉄舟は、自らの役割は終えたとして早くも12月9日に辞任した。

ところで、その年7月14日の廃藩置県で、現在の佐賀県域には佐賀・小城・鹿島・蓮池・唐津・厳原の各県が置かれた。9月4日に佐賀県と厳原県が合併し、県庁が伊万里に移されて伊万里県が成立。次いで11月14日に伊万里県は

県立美術館学芸課係長

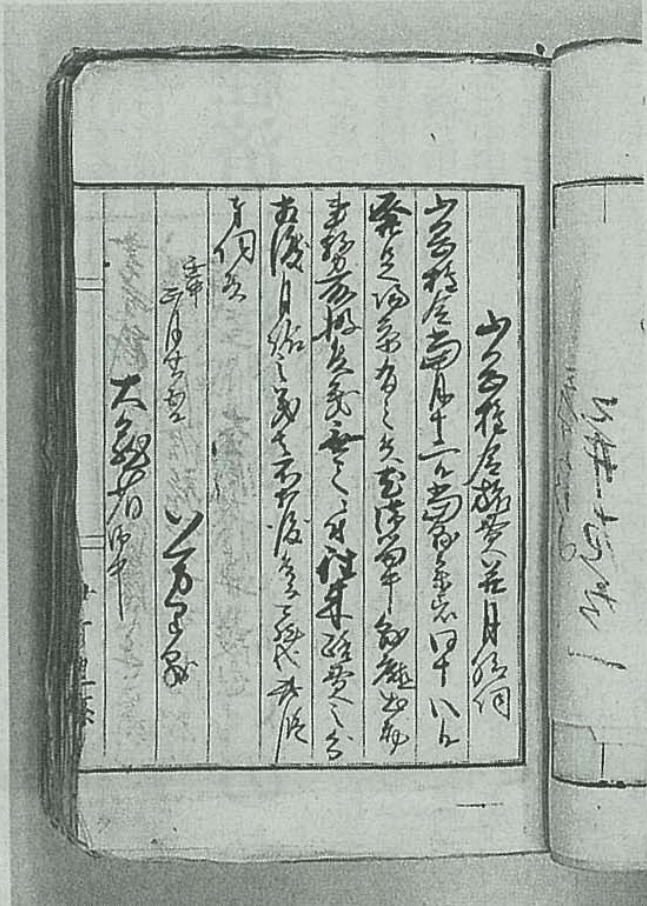
浦川 和也

唐津・小城・蓮池・鹿島の4県を合併し、県域が最も広がった。翌年1月、彼杵郡・高来郡の部分が長崎県に編入され、5月29日には再び県庁が佐賀に戻されて佐賀県と改称された。

鉄舟はこの統廃合の最中の1871年12月27日、伊万里県権令(知事に相当)に任命された。伊万里県は「旧藩の頑固士族が多くて尋常な者の手では治まらぬ」(鉄舟随感録)という評判があり、政府首脳は鉄舟の手腕に期待していた。

鉄舟は翌年1月6日に東京を発し、12日に伊万里に到着したが、伊万里県庁の仮庁舎だった円通寺には一度も登庁せず、18日には早くも伊万里を出発したという。

勝海舟の回想によれば、鉄舟は「身に軽装をなして頭に深き編笠を被って、始終市中やら百姓家やらを巡視しもっぱら民情を詳察」していたと述べている(鉄舟随感録)。



佐賀県明治行政資料の「山岡権令旅費并月給同」(1872年1月25日付、県立図書館所蔵)。鉄舟が一度も登庁しなかったため、「赴任旅費は出しても、月給は支給する必要がないのではないか」と伺いを立てている

勝海舟にあてた1月26日付の鉄舟の書簡によれば、「当任し、市中、農村を巡視した地六日出立、大急ぎ伊万里県へ罷り越し候処、咄しとは大相違にて、土、卒族大方商法をいたし、戦い等望み候もこのれなく(中略)。小生、仰せつけられ候決心の致し候もこれなく、参事その外強い

候。もつとも滞留中県庁出勤事務取り扱い候義これ無きにつき、往来路費の分相渡し、月給の義は相渡さず候て然るべき哉。この段伺い奉り候

海舟全集)。鉄舟は「難治」の伊万里県と記された記録がある。

伊万里県から出されたこと自体が、権令在任期間が極めて短期間だったために職員に「鉄舟イズム」が浸透していなかったことこの証左かもしれない。

権令退任(2月24日)後は、西郷隆盛らの要請を受けて侍従となり、1882(同15)年6月まで当初の約束通り10年間、宮内省に出仕し、明治天皇の信任も極めて厚かった。

鉄舟を評して「剣・禅・書の達人」と言われる。しかし、明治初期、鉄舟はその行政手腕を遺憾なく発揮。また、その職に恋々としなかった。まさに「デキル男、山岡鉄舟」であった。

◆メモ◆

「山岡鉄舟展」は県立美術館で8日から1月15日まで。12、19、26、29、31日と1月10日は休館。観覧料は大人600円(前売り500円)、大学生300円(同200円)、高校生以下無料。問い合わせは県立美術館、電話0952(24)3947。

伊万里県権令、一度も登庁せず離任